

映画「劔岳 点の記」 明治村でロケを敢行

柴崎 芳太郎 宮崎あおいさん 初登場 夫婦のシーン

映画「劔岳 点の記」の春のロケはすでに3月はじめから進められています。

今回、愛知県犬山市にある明治村では、3月25日から4月5日まで地上シーンのロケが行われました。このうち3月27日夕方と、28日の撮影が〈撮影現場取材〉として報道陣に公開されました。

今回のロケには、NHK大河ドラマ「篤姫」で主役を演じている宮崎あおいさんが登場しました。宮崎さんは、大河ドラマ収録に加えて、東映の作品・宮藤官九郎氏の「少年メリケンサック」主演の収録もという多忙な合間に、この「劔岳 点の記」のために3日間収録に駆けつけたということでした。

撮影シーンの舞台は東京・神田の「柴崎家」。柴崎芳太郎の奥さん「葉津よ」役である宮崎さんの初日です。

1年半ぶりに芳太郎が「劔岳」の仕事から帰って来て、自分がスケッチした絵を見せたり、長次郎の奥さんにもらった「ムシカリ」の赤い実の枝を、葉津よにプレゼントするシーンで、芳太郎の故郷にも同じ花があったなどの会話が交わされるシーンでした。

次の日の昼には、測量の仕事に出ている芳太郎に手紙を書くシーンの撮影がありました。長次郎の奥さんの「宇治佐和さん」宛に毛筆で手紙を書いて切手を貼るシーンです。本番も含め、封筒が6枚使われていました(6回撮ったということ)。このほか、柴崎家の玄関で新聞を広げ、「柴崎の劔岳登頂」を知るシーンなどが撮影されました。

柴崎家は、「夏目漱石の家」が使われました。この建物は、東京都文京区千駄木町にあった木造平屋建家屋で、明治36年から同39年まで夏目漱石が借りて住んでいたものが移築されています。

今回の取材で初めて知ったのは、



柴崎家の 宮崎・葉津よ

(写真：東映提供)

夕方や夜のシーンも真昼に軒先から庭まで大きな暗幕を張って、疑似太陽の大きなライトを使って撮影されていました。普通の映画はセット仕立て家屋での撮影が多いとのこと。これは大きな撮影カメラ位置や録音装置やライトなどの機材配置に使い勝手がいいためだそうです。

しかし木村監督は、劔岳周辺での撮影と同じく、リアリティを追求するため当時の建物にこだわり、当時の家具を再現して撮影に当たっているということでした。

この木村監督の姿勢は、早朝6時からの開園前に駅ホームを使っての撮影でもそうでした。明治39年に、

柴崎芳太郎が富山駅で宇治長次郎と出会うシーンです。

C型タンク機関車(アメリカのフィラデルフィアで1912年製造)を使って撮影されていました。

富山駅のシーンで、停車する客車の自然感を出すために車体に「ほこり」を付けるスタッフの姿がありました。美術・大道具の人たち三十数人総出で、ほこり付けでした。

監督からカメラを覗いては、指示が飛んでいました。

「やりました」とわざとらしくなっているだろっ！ こっち来て見てみるよ」

「列車の手すりのツヤを消せ」、「〈三等〉の文字もピカピカではおか

しいだろう」

エキストラは約70名。中部圏の劇団・フィルムコミッションの人たちにも宮村監督補佐をはじめとしたスタッフから演技指導がされていました。

降車する乗客へ、等間隔で歩かないように列車寄りを歩く人、そうでない人を細かく指示し、エキストラの練習も4~5回なされていました。このあとカメラを覗いての監督の指示が飛んでいました。

宮村監督補佐・スタッフに「十何時間も列車に揺られてきましたよという感じを出せ」と指示。

「乗客をそっちに通したらダメだと言っているだろ」

「生きていないとダメなんだよ」「歩き方がおかしい」「気力なくただ歩いているだけだろ」「もっと列車寄りにするか、離れるか」と、注文が付けられていました。

「柴崎は先頭に降りてくるのではないのだから、エキストラの配置を考えろ」

「その背広、帽子がおかしい。頭の上に載っているだけだろ」

「もう、手に持って歩け」。他の乗客についても編笠をとったり、かぶせたり。

木村監督は、いらいらしてタバコを吸いすぎて空箱になる。

「KENT」や「HOPE」をなんと1日100本も吸うそうです。

開園まで時間がなくなって「9時

までだろう!? もう俳優さんを連れてこいよ」

8時ころ、浅野忠信さん、香川照之さん登場。ここから降車客の流れを入れて7回~8回のリハーサルが行われていました。

そして本番の撮影。

まず、柴崎の正面からレールに載せたカメラで徐々に近寄って撮って「カーッと!」。

次は長次郎の正面からクレーンに載ってカメラ回してクレーン撮りして「カーッと!」。

改札から駅の外に出るシーンは去年の9月富山の岩峠寺駅で、撮影されました。今回は、当時の蒸気機関車を入れたホームでのシーンを明治村で撮ったというわけです。

続いてのクレーン撮影は蒸気機関車の前方から撮影。

スモークを焚いたり、自然のままの機関車の蒸気にしたり。

風で煙が流れすぎてホームを歩く乗降客が隠れても、逆に蒸気が吹き飛ばされて少なすぎてもダメ。その

塩梅(あんばい)が難しい。

「佐藤、運転士さんに蒸気をお願いするのに怒鳴るのかっ」「スママセンッ!」「命令できるのはオレだけだ」

宮村監督補佐も「なめているのかおまえは」とはやす。

降車客の流れ、蒸気の量、雲間の陽差しをにらみつ

「クレーン上から下まで何秒だ!」「7秒ですっ!」

「本番!」「天気は大丈夫かっ!」雲間から陽が出るまで「待ち」。「あと何分が出るんだっ!」「あと2分で出ますっ!」

とカメラを回すたびにスタッフから大声が上がっていました。

クレーン撮りを6~7回繰り返して、9時半にやっと終わりました。

多分、映画では長次郎が柴崎芳太郎を富山駅に迎えに行き、挨拶して、荷物を持ってあげて、蒸気機関車の停車する脇を駅舎に向かう数分の映像でしょう。

ここに、これだけの現場の撮影セット準備と手間と演技と人員が投入さ



富山駅に芳太郎を出迎える長次郎



夏目漱石邸の縁側にて

れているとは、本当に驚きました。

同時に、木村監督の緻密な画面作りへこだわりの一端が分かったような気がしました。この緊張感をこの先撮影終了まで持続して1本の映画を完成させていくのかと思うとつくづく大変なことだと思いました。

俳優さんと監督からもらったコメントを紹介します。

浅野 「いろいろ状況も変わってきたが、最後まできちんとやり抜きたい」

香川 「新たな気持ちです。まだ撮り切れていない。いまから新しく1本撮り切るつもりでがんばりたい」

宮崎 「私は3日間だけですが、夫を支えて、優しく見守る妻を演じられたらいいと思います」

監督 「役者さんに入ってもらって

2年目ですが、最後まで撮り切れたらすごい映画になると思います。スタッフもそう思って全力で取り組んでいます。

ぼくは撮り切れるかすごいプレッシャーです。来年も撮りたいが、回りが許してくれないだろうな(笑)」
宮崎 (監督をどう思うかとの質問に)

「初対面なのですが、この映画についてたくさんしゃべって下さった。とても楽しくお話を聞いています」

監督 「こんな若い女優さんですから、話するときはドキドキしている。すてきなお嬢さんです」

宮崎 「台本を読んでみるとすごい内容です。もし、最初から撮影に参加して、乗り越えた時の感動はすごいだろうなと思いました」

「山岳ロケはこわいけど、すこしだけ行ってみたい気もします」

宮崎 (柴崎さんみたいな人と一緒だったらという質問に) 「二人でいられるとき、いつも笑顔でいられたらいいと思います」

浅野 (宮崎さんみたいな人が奥さんだったらとの質問に) 「山には行かない。会社をクビになっても(笑)」

最後に、香川照之さんのコメントを紹介します。

「私もこの映画にとっても期待していて、明日からでも早く山に登って続きを撮りたい、山に入りたくて胸が一杯です」

という香川さんの顔は上気していて、目が潤んでいるのが分かりました。その気持ちは取材する記者たちの胸を打つものがありましたことをお伝えして取材報告とします。🌊

(文・写真 本誌編集事務局 浦郷武夫)

「劔岳 点の記」の情報に関しては、下記ページをご覧ください。

■ 社団法人日本測量協会 「劔岳 点の記コーナー」
<http://www.jsurvey.jp/tsurugidake/>

■ (株)東映 映画「劔岳点の記」オフィシャルサイト
<http://www.tsurugidake.jp/>